システム同定の理論 システム同定の手順 システム同定の実演

制御のためのシステム同定 7章 モデルの選定法と妥当性の検証

川勝孝也

2024年6月13日

川勝孝也 制御輪読会 制御のためのシステム同定 7章

 システム同定の理論
 予測誤差法

 システム同定の手順
 持続的励起

 システム同定の実演
 状態空間モ

予測誤差法

予測誤差

時刻nとして、予測誤差 ϵ で構成される損失関数 $J(\theta)$ を最小化する θ を求める $\epsilon(n, \theta) = y(n) - \hat{y}(n|\theta)$ (1)

対数尤度

予測誤差が平均0で分散の2の正規分布に従う場合、対数尤度は式(2)で求まる

$$\log \mathcal{L}(\boldsymbol{\theta}) = -\frac{N}{2} \log(2\pi\sigma^2) - \frac{1}{2\sigma^2} \sum_{n=1}^{N} \epsilon^2(n, \boldsymbol{\theta})$$
(2)

損失関数

予測誤差に正規分布を仮定した最尤推定は、式(3)の最小2乗法と等価になる

$$\arg\max_{\boldsymbol{\theta}} \mathcal{L}(\boldsymbol{\theta}) = \arg\min_{\boldsymbol{\theta}} J(\boldsymbol{\theta}) = \arg\min_{\boldsymbol{\theta}} \sum_{n=1}^{N} \{y(n) - \hat{y}(n|\boldsymbol{\theta})\}^2$$
(3)

システム同定の理論 予測誤差法 システム同定の手順

周波数特性

線形モデル

 z^{-1} を1周期の遅延、nを時刻として、出力y(n)と操作u(n)と雑音w(n)の関係 $y(n) = G(z, \theta)u(n) + H(z, \theta)w(n)$ (4)

周波数重み関数

式(4)で、パーセバルの定理より、損失関数に周波数重み関数W(ω)が現れる $J(\boldsymbol{\theta}) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} W(\omega, \boldsymbol{\theta}) \left| \frac{Y(\omega)}{U(\omega)} - G(\omega, \boldsymbol{\theta}) \right|^2 d\omega$ (5) $W(\omega, \boldsymbol{\theta}) = |H(e^{j\omega}, \boldsymbol{\theta})|^{-2} |U(\omega)|^2$

式(4)が低域通過特性で、操作uが白色性なら、低周波の同定精度が低下する

 システム同定の理論
 予測誤差法

 システム同定の手順
 持続的励起性

 システム同定の実演
 状態空間モデ

式誤差モデル

立式

 z^{-1} を1周期の遅延、nを時刻として、出力y(n)と操作u(n)と雑音w(n)の関係

$$A(z)y(n) = B(z)u(n) + w(n) = w(n) + \sum_{k=1}^{\infty} b(k)u(n)z^{-k}$$
(6)

求解

最適解 $\hat{\boldsymbol{\theta}}$ が求まる条件は、式(7)の行列Rが正定値で、損失関数 $J(\boldsymbol{\theta})$ が凸関数

$$J(\boldsymbol{\theta}) = \sum_{n=1}^{N} \left\{ y(n) - \boldsymbol{\theta}^{\top} \boldsymbol{\varphi}(n) \right\}^{2} = c(N) - 2\boldsymbol{\theta}^{\top} \boldsymbol{f}(N) + \boldsymbol{\theta}^{\top} R(N) \boldsymbol{\theta}$$

$$R(N) = \sum_{n=1}^{N} \left[\frac{\boldsymbol{\varphi}_{y}(n) \boldsymbol{\varphi}_{y}^{\top}(n)}{\boldsymbol{\varphi}_{u}(n) \boldsymbol{\varphi}_{y}^{\top}(n)} \middle| \frac{\boldsymbol{\varphi}_{y}(n) \boldsymbol{\varphi}_{u}^{\top}(n)}{\boldsymbol{\varphi}_{u}(n) \boldsymbol{\varphi}_{u}^{\top}(n)} \right]$$

$$\hat{\boldsymbol{\theta}}(N) = R^{-1}(N) \boldsymbol{f}(N)$$
(7)

 システム同定の理論
 予測誤差法

 システム同定の手順
 持続的励起性

 システム同定の実演
 状態空間モデ

持続的励起性

正定値の条件

操作uがky+ku次の持続的励起性で、安定かつ可観測なら、行列Rは正定値

$$\varphi_{y}(n) = \begin{bmatrix} -y(n-1) \\ \vdots \\ -y(n-k_{y}) \end{bmatrix}, \quad \varphi_{u}(n) = \begin{bmatrix} u(n-1) \\ \vdots \\ u(n-k_{u}) \end{bmatrix}$$
(8)

持続的励起性

自己相関 ϕ_{uu} で、式(9)の行列 R_k が正則の場合、操作uはk次の持続的励起性

$$R_{k} = \begin{bmatrix} \phi_{uu}(0) & \phi_{uu}(1) & \cdots & \phi_{uu}(k-1) \\ \phi_{uu}(1) & \phi_{uu}(0) & \cdots & \phi_{uu}(k-2) \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \phi_{uu}(k-1) & \phi_{uu}(k-2) & \cdots & \phi_{uu}(0) \end{bmatrix}$$
(9)

正弦波は2次の持続的励起性で、次数を高めるには、最大周期列信号を使う

システム同定の理論	
システム同定の手順	
システム同定の実演	状態空間モデ

状態空間モデル

状態方程式

離散量nを時刻として、行列A, B, Cで記述される状態空間モデルを考えよう $oldsymbol{x}(n) = Aoldsymbol{x}(n) + Boldsymbol{u}(n),$ $oldsymbol{y}(n) = Coldsymbol{x}(n)$ (10)

ハンケル行列

インパルス応答g(n)でハンケル行列Hを構成し、可制御・可観測行列に分解

H =	$\begin{bmatrix} g(1) \\ g(2) \\ \vdots \\ g(k+1) \end{bmatrix}$	$g(2)$ $g(3)$ \vdots $g(k+2)$	···· ··· ··.	$g(k+1)$ $g(k+2)$ \vdots $g(2k+1)$	=	$\begin{bmatrix} B\\AB\\\vdots\\A^kB\end{bmatrix}$	$\begin{bmatrix} C \\ (C_{2}) \\ \vdots \\ (CA) \end{bmatrix}$	$\begin{bmatrix} \mathbf{A} \\ \mathbf{A} \end{bmatrix}^{\top} \\ \begin{bmatrix} \mathbf{k} \\ \mathbf{k} \end{bmatrix}^{\top} \end{bmatrix}^{\top}$	(11)
可制御	• 可粗测行:	列からR(っを取る	得してい	762	不亦性;	を利田	1.71	を質出

システム同定の理論	モデル構造の選知
システム同定の手順	
システム同定の実演	



事前に得られた物理知識に基づき、モデルの構造を決める必要がある

手順

- 1. 同定を行うモデルの構造を選定
- 2. 無駄時間やモデルの次数を決定

選定

交差検証を実施して、情報量基準に注目して、最適なモデル構造を選ぶ

評価

極零相殺や残差の白色性に問題がある場合、別のモデル構造を検討する

圧縮

平衡実現により、ハンケル特異値に注目して、モデルの次数を削減する

式誤差 (ARX) モデル

立式

 z^{-1} を1周期の遅延、nを時刻として、出力y(n)と操作u(n)と雑音w(n)の関係 A(z)y(n) = B(z)u(n) + w(n) (12)

得失

♣ 雑音と操作の伝達関数の極が共通なので、入力側の外乱に適する
 ♣ 線形回帰なので最適化の計算量が低く、パラメータも削減できる
 ♣ 雑音に脆弱なので、高次だと過学習し、低次だと精度が悪化する

特性

周波数重み関数が高域通過特性を持つので、プレフィルタによる補正が必要 $W(\omega, \theta) = |A(\omega, \theta)|^2 |U(\omega)|^2$ (13)

システム同定の理論 モデル構造の選定 システム同定の手順

式誤差 (ARMAX) モデル

立式

 z^{-1} を1周期の遅延、*n*を時刻として、出力y(n)と操作u(n)と雑音w(n)の関係 A(z)y(n) = B(z)u(n) + C(z)w(n)(14)

得失

#音と操作の伝達関数の極が共通なので、入力側の外乱に適する # 雑音専用の多項式を割り当てるので、モデルの柔軟性が改善する #音と操作が共通の極を持ち、出力誤差モデルよりも雑音に脆弱

特性

周波数重み関数が高域通過特性を持つので、プレフィルタによる補正が必要 $W(\omega, \boldsymbol{\theta}) = |A(\omega, \boldsymbol{\theta})|^2 |C(\omega, \boldsymbol{\theta})|^{-2} |U(\omega)|^2$ (15)

出力誤差 (OE) モデル

立式

 z^{-1} を1周期の遅延、nを時刻として、出力y(n)と操作u(n)と雑音w(n)の関係 $y(n) = B(z)F^{-1}(z)u(n) + w(n)$ (16)

得失

♣ 雑音と操作の伝達関数の極が独立なので、出力側の外乱に適する
 ♣ 雑音の分離に優れ、開ループ実験なら動特性を正確に推定できる
 ♣ 非線形最適化なので、計算量が重く、局所解に陥る可能性がある

特性

周波数重み関数が全域通過特性を持つので、プレフィルタによる補正が不要 $W(\omega, \theta) = |U(\omega)|^2$ (17)

出力誤差 (BJ) モデル

立式

 z^{-1} を1周期の遅延、nを時刻として、出力y(n)と操作u(n)と雑音w(n)の関係 $y(n) = B(z)F^{-1}(z)u(n) + C(z)D^{-1}(z)w(n)$ (18)

得失

♣ 雑音と操作の伝達関数の極が独立なので、出力側の外乱に適する
 ♣ 雑音の分離に優れ、開ループ実験なら動特性を正確に推定できる
 ♣ 非線形最適化なので、計算量が重く、局所解に陥る可能性がある

特性

周波数重み関数が全域通過特性を持つ場合、プレフィルタによる補正が不要 $W(\omega, \theta) = |C(\omega, \theta)|^{-2} |D(\omega, \theta)|^2 |U(\omega)|^2$ (19)

情報量基準

赤池情報量基準

k次モデルをN個の標本で同定して、誤差が分散 σ^2 の正規分布に従う場合、 AIC = $-2 \log \mathcal{L}(\theta) + 2k \approx N \log \sigma^2 + 2k$ (20)

ベイズ情報量基準

k次モデルをN個の標本で同定して、誤差が分散 σ^2 の正規分布に従う場合、

BIC =
$$-2\log \mathcal{L}(\theta) + k\log N \approx N\log \sigma^2 + k\log N$$
 (21)

最終予測誤差

k次モデルをN個の標本で同定して、誤差が分散σ²の正規分布に従う場合、

$$FPE = \frac{N+k}{N-k}\sigma^2 \approx \exp\frac{AIC}{N}$$
(22)



極零相殺

同定したモデルの極と零点が重複する場合は、モデルの次数が過剰と考える $G(s) = \frac{N(s)}{D(s)} = \frac{s+2}{(s+2)(s+5)} = \frac{1}{s+5}$ (23)

信頼区間

極と零点がぴったり重なるのは稀なので、信頼区間の重複の有無を評価する $G(s)=\frac{s+2.01}{(s+1.99)(s+5)}\approx\frac{1}{s+5} \tag{24}$

残差解析

残差の白色性

残差e(n)の白色性も、同定したモデルの妥当性の評価で、重要な根拠となる

$$e(n) = H^{-1}(z) \{y(n) - G(z)u(n)\}$$

$$y(n) = G(z)u(n) + H(z)w(n)$$
(25)

残差の独立性

♣ 出力誤差モデルでは、残差e(n)と操作u(n)の独立性を重視して評価する
 ♣ フィードバック系の場合は、残差e(n)と操作u(n)が相関を持つので注意

推定誤差

雑音誤差

観測雑音やシステム雑音など、確率的な外乱に起因する、同定結果の曖昧性 $y(n) = G_0(z)u(n) + w(n) = G(z, \theta)u(n) + \xi(n)$ $P(N) = \mathbf{E} \Big[(\hat{\theta} - \theta_0)(\hat{\theta} - \theta_0)^\top \Big] \approx \frac{\sigma^2}{N} \bar{R}^{-1}$ $\bar{R} = \mathbf{E} \Big[\left(\frac{d}{d\theta} \hat{y}(n|\theta) \right) \left(\frac{d}{d\theta} \hat{y}(n|\theta) \right)^\top \Big]$ (26)

分散 σ^2 の雑音のもとで、推定値 $\hat{\theta}$ の誤差の共分散P(N)は、標本数Nと反比例

系統誤差

モデルの次数など、システムの構造的な差異に起因する、同定結果の曖昧性

$$\hat{\boldsymbol{\theta}} = \operatorname*{arg\,min}_{\boldsymbol{\theta}} \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} W(\omega) |G(e^{j\omega}, \boldsymbol{\theta}) - G_0(e^{j\omega})|^2 d\omega$$
(27)

系統誤差により、伝達関数 G, G_0 が乖離して、周波数重み関数 $W(\omega)$ が現れる

システム同定の理論	モデル構造の選定
システム同定の手順	
システム同定の実演	同定モデルの圧縮

対角正準形

状態方程式

連続量tを時刻として、行列A, B, Cで記述される状態空間モデルを考えよう $\dot{\boldsymbol{x}}(t) = A \boldsymbol{x}(t) + B \boldsymbol{u}(t),$ $\boldsymbol{y}(t) = C \boldsymbol{x}(t)$ (28)

対角正準形

行列Aの固有値を $\lambda_1, \ldots, \lambda_k$ として、式(29)の正則行列Tで、行列Aを対角化

$$\begin{aligned} \boldsymbol{x}(t) &= T\hat{\boldsymbol{x}}(t) \\ \dot{\hat{\boldsymbol{x}}}(t) &= \hat{A}\hat{\boldsymbol{x}}(t) + \hat{B}\boldsymbol{u}(t) \text{ where } \hat{A} = T^{-1}AT = \text{diag}\left(\lambda_1, \dots, \lambda_k\right) \end{aligned} \tag{29} \\ \boldsymbol{y}(t) &= \hat{C}\hat{\boldsymbol{x}}(t) \end{aligned}$$

制御・観測

行列 \hat{B},\hat{C} で固有値 λ_k に対応する要素が0だと、状態 \hat{x}_k の制御・観測が不可能

システム同定の理論	モデル構造の選定
システム同定の手順	
システム同定の実演	同定モデルの圧縮

モデル圧縮

可制御性グラム行列

行列 W_c が正則なら、そのシステムの内部の状態x(t)を操作u(t)で制御できる

$$W_c = \int_0^\infty (e^{At}B)(e^{At}B)^\top dt \Rightarrow AW_c + W_c A^\top + BB^\top = 0$$
 (30)

可観測性グラム行列

行列 W_o が正則なら、そのシステムの内部の状態 $\boldsymbol{x}(t)$ を出力 $\boldsymbol{y}(t)$ で観測できる

$$W_o = \int_0^\infty (Ce^{At})^\top (Ce^{At}) dt \Rightarrow A^\top W_o + W_o A + C^\top C = 0$$
 (31)

平衡実現による圧縮

適当な行列*S*で、式(32)の対角化を行うと、ハンケル特異値 $\sigma_1, \ldots, \sigma_k$ を得る $\hat{W}_c = SW_cS^{\top} = \hat{W}_o = S^{-\top}W_oS^{-1} = \text{diag}(\sigma_1, \ldots, \sigma_k)$ (32)

システム同定の理論	モデル構造の選定
システム同定の手順	
システム同定の実演	同定モデルの圧縮

可制御性の証明

十分条件

式(33)の操作u(t)により、時刻 $t_0 < 0$ から0にかけて、状態 x_0 からx(0)に到達

$$\boldsymbol{u}(t) = (e^{-At}B)^{\top} W_c^{-1}(\boldsymbol{x}(0) - e^{-At_0}\boldsymbol{x}_0)$$

$$\boldsymbol{x}(t) = e^{At} \left(\boldsymbol{x}(0) + \int_0^t e^{-A\tau} B \boldsymbol{u}(\tau) d\tau \right) \Rightarrow \lim_{t_0 \to -\infty} \boldsymbol{x}(t_0) = \boldsymbol{x}_0$$
 (33)

必要条件

行列 W_c が非正則なら、式(34)で状態 x_0 から0に到達する操作u(t)は存在せず

$$\exists \boldsymbol{x}_{0} \neq \boldsymbol{0}, \quad \boldsymbol{x}_{0}^{\top} W_{c} \boldsymbol{x}_{0} = 0 \Rightarrow (e^{A\tau} B)^{\top} \boldsymbol{x}_{0} = \boldsymbol{0}$$
$$\lim_{t \to \infty} \boldsymbol{x}(t) = \lim_{t \to \infty} e^{At} \left(\boldsymbol{x}_{0} + \int_{0}^{t} e^{-A\tau} B \boldsymbol{u}(\tau) d\tau \right) = \boldsymbol{0}$$
(34)
$$\Rightarrow \boldsymbol{x}_{0}^{\top} \boldsymbol{x}_{0} = -\lim_{t \to \infty} \int_{0}^{t} \boldsymbol{x}_{0}^{\top} e^{-A\tau} B \boldsymbol{u}(\tau) d\tau = 0 \perp \boldsymbol{x}_{0} \neq \boldsymbol{0}$$

システム同定の理論	モデル構造の選定
システム同定の手順	
システム同定の実演	同定モデルの圧縮



ドライヤーの例題を通して、モデル構造の選定と妥当性の評価を行う

```
load dry2;
ze = dtrend(dry2( 1:500));
zv = dtrend(dry2(501:end));
```

システム同定の理論	モデル構造の選定
システム同定の手順	
システム同定の実演	

適当な最大周期列信号をシステムに入力して、実験データを取得する



idplot(ze);

実験

システム同定の理論	モデル構造の選知
システム同定の手順	
システム同定の実演	同定モデルの圧綱



パワースペクトルとコヒーレンスを描画して、周波数特性を確認する



mscohere(ze.u, ze.y, [], [], [], 1/ze.Ts);

川勝孝也 制御輪読会 制御のためのシステム同定 7章

システム同定の理論	モデル構造の選究
システム同定の手順	
システム同定の実演	

無駄時間と次数

損失関数により、無駄時間を決定してから、モデルの次数を決定する



th = arx(ze, selstruc(arxstruc(ze, zv, struc(1:5, 1:5, 3)), 0));

川勝孝也 制御輪読会 制御のためのシステム同定 7章



極と零点の信頼区間の重複が見られるので、モデルの次数を削減する



zpplot(th2zp(th), 3);

システム同定の理論	モデル構造の選知
システム同定の手順	同定モデルの評価
システム同定の実演	

時間領域で評価

雑音なしの状態で時間発展を求め、実験データとの適合性を評価する



compare(zv, th);

システム同定の理論	モデル構造の選
システム同定の手順	同定モデルの評
システム同定の実演	

周波数領域で評価

モデル構造を変えながら、ボード線図を描画して、信頼性を評価する



bodeplot(th);

システム同定の理論	モデル構造の選び
システム同定の手順	同定モデルの評(
システム同定の実演	



残差の自己相関を求め、残差の白色性を評価して、妥当性を棄却する



resid(zv, arx(ze, [2 2 3]));

システム同定の理論	モデル構造の選定
システム同定の手順	
システム同定の実演	同定モデルの圧縮

ハンケル特異値

ハンケル特異値に注目すれば、雑音に適合した部分空間を特定できる



[thb, g] = balreal(arx(ze, [20 20 3]));

川勝孝也 制御輪読会 制御のためのシステム同定 7章

システム同定の理論	モデル構造の選定
システム同定の手順	
システム同定の実演	同定モデルの圧縮



平衡実現により、可制御性・可観測性に注目して、次数を削減できる



bodeplot(xelim(balreal(arx(ze, [20 20 3])), 3:20));

川勝孝也 制御輪読会 制御のためのシステム同定 7章